

集英社新書ノンフィクション

9つの人生

現代インドの聖なるものを求めて



ウィリアム・ダルリンプル
パロミタ友美訳

NINE LIVES

William Dalrymple

サ
ミ
ー
へ

目次

まえがき 6

第一章 尼僧の話 23

第二章 カンヌールの踊り手 66

第三章 エッランマの娘たち 107

第四章 叙事詩の歌い手 142

第五章 赤い妖精 196

第六章 僧侶の話 253

第七章 神像の作り手 299

第八章 黄昏の君 344

第九章 盲目の吟遊行者のうた 389

翻訳者あとがき 436
参考文献 445

凡例

・都市名の表記

原書執筆当時の都市名は旧名が流通していたこともあり著者は基本的に旧名を採用しているが、近年ポストコロナアル的な議論の高まりもあって現在では現地語をベースにした都市名の使用が一般的となっている。本書では章ごとに、都市名の初出に「コルカタ（カルカタ）」などと丸カッコで旧名を付し、以降は現行の都市名を使用している。

・長さや重さの単位

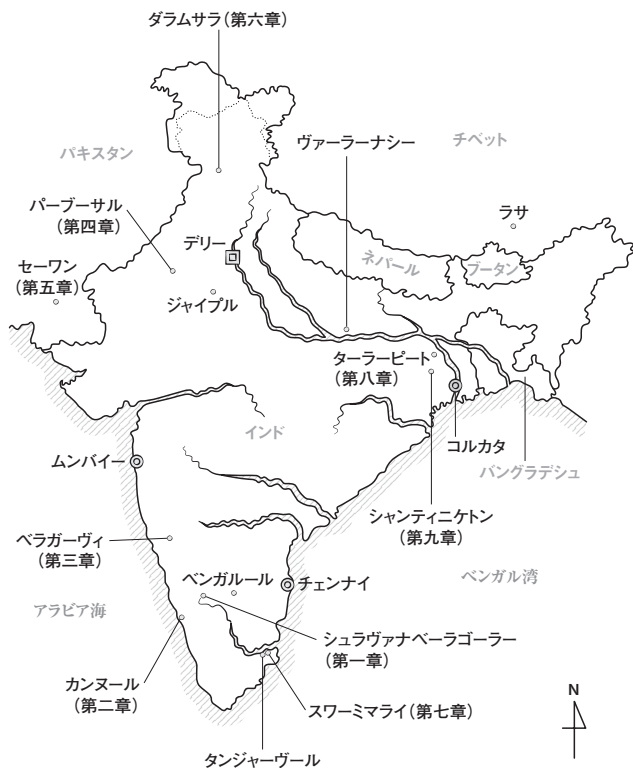
原書ではヤード・ポンド法が採用されているが、日本のみならずインドでもメートル法が一般的であるため、本書ではメートル法での記述とした。

・現地の言葉のカタカナ表記

インドでは州ごとに公用語が違う。本書では章ごとに舞台となる州が異なるため、各章のカタカナ表記は各言語の専門家の監修を元に決定した。ただし、章を跨いで使用されるような汎インド的な語彙については、ヒンディー語もしくはサンスクリット語の発音を基本とし、場合によっては文脈に沿って特定の州の言語の発音を採用している。特にベンガル語については熟考の末かなり柔軟な表記を採用することになった。

また、一部「ヒマラヤ（現地ではヒマラーヤ）」や「ガンジス（同ガンガー）」「バラモン（同ブラフマン／ブラーミン）」「ベンガル（同バングラ）」など日本語である程度一般的に広まっている語彙については、現地の発音を必ずしも反映させていない場合がある。

関連地図



まえがき

この本の種が生まれたのは一六年前、高く澄んだヒマラヤ山でのこと。一九九三年、五月の夏の朝だった。バーギーラティ川の岸辺から、樹の生い茂る険しい谷に沿って山を登っていた。山道は柔らかく苔むしていて、羊歯や蕨、いばらの茂みを横目に、背の高いヒマラヤ杉の林を抜けて行く。ときには小さな滝が杉の木に降りそそぐ。すでに一〇日のトレックを終え、あと一日ほどで終着点のケーダールナート大寺院に着くところだった。ヒンドゥー教ではシヴァ神の主な棲家のひとつと信じられている所で、チベットのカイラス山と並んで、ヒンドゥー神話世界におけるオリンポス山の候補地である。

まったくひとりの道中というわけでもなかった。前の晩も多くの巡礼集団を見かけた。たいていはラージャスターン州から来た村人たちだ。山の麓のお寺や市場の傍にキャンプを張って、流木を薪に火を焚き、冷えた手をあたためていた。今、朝の光に照らされ、その数は魔法で何倍にも膨れ上がったかのように、狭い山道はインド人の大海の様相を呈していた。国じゅうのすべての地域から、すべての社会階級の人々が来ていると言っても過言ではない。インドの南北

からやって来た農民も、読み書きを知らない労働者も、都市の文化人も、皆肩を突き合わせているさまはさながら現代インド版『カンタベリー物語』といったところだ。金持ちは馬に乗るか、ドゥーリーという、籠編みの椅子をリュックサックにしたようなものに乗って運ばれる。しかし大多数の巡礼者は貧しく、歩くという選択肢しか与えられていない。

だいたい一キロメートルごとに、二、三〇人ほどの村人の集団が険しい山道を登っていると、ころに出くわした。ヴェールで覆われた女たちを先導するのは、裸足で腰の曲がった、白髪まじりの髭を生やした男たちだ。中でも信仰心の厚い巡礼者は、小さな祠ごとに祈りの拝礼をする。祠と言っても、その多くは積み重なった石と、その後ろにポスター・カレンダーが貼ってあるだけのものだ。

サードゥーという、インドの放浪する聖者たちも、まばゆいばかりに道を埋めつくしていた。私が標高の高い牧草地の、膝まであるオダマキや金鳳花、立葵の間を彷徨う間、視界には常に、瘦せていながらも頑強な肉体に、ドレッドヘア、髭も生やしっぱなしの男たちがいた。集団で旅している者もいれば、ひとりで旅している者もいた。ほとんどのサードゥーは、歩きながらも深い瞑想に浸っているように見えた。金属の三叉鉾の重さに引きずられながら、ヒマラヤ山の清浄な空気と水晶のような澄んだ静けさに解脱を求めている。

山道をよじ登る道すがら、ひとりのサードゥーと話す機会があった。全裸の身体に灰を塗り

たぐったそのサードウーは、私と同年代だった。私はそれまで、インドの「聖者」というものは辺鄙な村落の出身で、盲目的で素朴な信仰の結果としてそうだったのだと、何となく思い込んでいた。しかし話し始めてみるとすぐに、アジャイ・クマール・ジャールと名乗ったこの男がもつとずっとコスモポリタンな人物だと分かった。眼下では猛禽類が上昇気流に乗って旋回している、険しい山道を共にしながら、私は彼の人生について尋ねた。アジャイは少しためらった後、話してくれた。

「私が放浪の出家者になったのは、ほんの四年半前のことです。それまでは、ケルビネーターという、ムンバイ（ボンベイ）の家電会社で営業部長をしていました。パトナ大学でMBAを取得していて、会社の期待の星でした。でもある日、私は残りの人生ずっと扇風機や冷蔵庫を売って過ごすことはできない、と気づいたのです。それで会社を辞めました。上司と両親に手紙を書いて、持ち物は貧しい人々に寄付して、ヴァーラーナシー（ベナールス）行きの電車に乗ったんです。そこでスーツを捨てて、全身に灰を塗り込みました。そして僧院に駆け込んだのです」

「後悔したことはありませんか」と聞くと、

「本当にとっさの決断だったんです」とアジャイは言った。「だけど、一瞬たりとも後悔したことはありません。何日も食べていなくて、最も腹を空かせている時でさえも」

「しかし、よほどの生活の変化だったでしょう。どうやって適応したんですか」

「もちろん、最初は大変でしたよ。でも人生で本当に価値のあることには、時間がかかるものです。私はあらゆる快適さに慣れきっていました。私の父は政治家で、この国ではとても裕福だったんです。でも私は、決して彼のような世俗的な暮らしはしたくありません」

そこで峰に差しかった。どちらを見渡しても急斜面だった。アジャイは森の方を指し示し、我々は牧草地の広がる地面に降り立った。緑の遠景が目の痛くなるような雪山の白に縁取られて、真^まっ直^すぐに目に飛び込んでくる。

「山を歩いていると、頭がスッキリするでしょう。心配ごとなんか消えてしまいます。ほら、見て下さい！ 私は毛布と水筒以外の何も持っていません。何も所有していないから、何の心配もないのです」

アジャイは微笑^{ほほえ}んだ。「欲望を制御^{けいぎ}することを覚えれば、何でもできるようになるんです」本物の、出家したナーガ^{ナーガ}行者がMBAでもありうるという世界には、この本のための旅の中で少しづつ慣れていくことになった。

例をもうひとつ挙げると、昨年の一二月、西ベンガル州ビルブム県の火葬場を根城とする有名なタントラ行者を見つけることができた。トボン・ゴーシャ^{トボン・ゴーシャ}ミーは頭蓋骨を茶碗^{ちやわん}にして生活している。彼は二〇年前にアメリカの比較宗教学の教授のインタビューを受けていた。その

教授はそのインタビューを元に、トポンによる処女や自殺者の頭蓋骨を用いた降霊術と魔術についての論文を書いた。不吉さがあるとはいえ、魅力的な内容だった。だからビルブム県のさまざまな火葬場を巡り歩いて観光するのは非常に楽しかった。そしてついに、町外れの小さなカーリー女神寺院の外に座っているトポンを見つけた。トポンは女神への供儀の準備をしているところだった。

日はすでに沈みかけていて、空は薄暗くなっている。火葬の煙は今もどこかおどろおどろしく寺院から立ち上っている。静かな熱気の中、どこに行ってもハエがやかましい。日が暮れる中、私はトポンとタントラについて話した。トポンは、まちがいなく自分は若い頃、あの教授にインタビューされた時、熱心に頭蓋骨で食事をいただいていた、と請け合った。そして、そうだ、彼が書いたことはすべて本当のことだし、今も時折、頭蓋骨を使ってその元の主を呼び寄せ、力を行使する、と言った。でも残念なことに、私にその詳細を語ることはできないのだ、と言う。なぜかと聞くと、彼のふたりの息子がニュージャージーで眼科医として成功していて、家族が黒魔術に手を出しているというような噂うわさが立てば、アメリカ東海岸での経済生活を脅かしかねない。そうした事態に発展しかねないインタビューは、二度と受けるべからず、と言われているのだそうだ。今ではトポンは、頭蓋骨を人に譲って家族のいるアメリカに渡ることも考えているのだという。

インドで暮らすようになって長い時間が過ぎたが、この国は私が八〇年代に当初移住した時には想像もしえなかったような速さで変化している。最初の移住の後、一〇年のギャップを経て再びデリーで暮らし始めた時、デリー南西の端にある花形都市のグルグラム（グルガオン）の郊外からさらに五キロメートルほど離れた土地にある農場の家を借りた。道路の尽きた先にあるわが家からでも、ほんの二年前までは手付かずの農地だった土地に、コールセクターやIT企業、お洒落なマンションを内包した新興住宅街が瞬く間に出来上がっていくのが見えた。その六年後には、グルグラムはあつという間にわが家に接近して、今ではうちの農場にほぼ接している。そしてうちからほんの四〇〇メートルほどの所に、アジア最大級のショッピングモールと喧伝けんでんされている施設ができるらしい。

西欧の、ロバのような発展の仕方しか知らない身にとっては、息を呑むような速さである。イギリスだったら二五年はかかるような建設が、ここではほんの五ヶ月で済んでしまうのだ。今ではよく知られているように、インドは日本を追い抜いて世界第三位の経済規模になろうとしている。そしてCIAの予測によれば、インド経済は二〇五〇年頃までにはアメリカをも抜くだろうと言われている。

この勢いがありにも凄まじいので、この爆発的な発展のもろさと、それが内包する不公平さは見逃されてしまいがちだ。グルグラムからジャイプル高速道路に乗って車を走らせていく

と、まるで、時のゆつくりと進む前近代の昔へとタイムトラベルをしている気分になる。グル
グラム中心部のマイクロソフトやグーグル・アジアから二〇分も離れないうちに、車やトラッ
クはラクダや牛車に道を譲るようになり、服装もスーツやデニム、野球帽から埃^{ほこり}っぽい木綿の
腰巻^{ドレーパー}布やターバンに変わる。まるで違うインドのようである。そしてこの現代と伝統の狭間^{はざま}で
取り残されているさまざまな土地が、この本で取り上げるほとんどの物語の舞台となる。なぜ
ならばこの、インドやパキスタンで盛大に芽吹いているメガ・シティの外側の小さな町や村々
で、南アジアの宗教は非常に魅力的で、また予測のできない変化のただ中にあるのだ。

グローバル経済の中心で、インド亜大陸が伝統に回帰する形で前進していることについては、
すでに多くが書かれている。しかしこのような激震を受けて南アジアのさまざまな宗教的伝統
がどのように変化し、あるいは実際にこれらの豊かな伝統を生きる人々がどのように嵐の中心
で生き延びているのかについては、今のところあまり書かれていない。西洋人は東洋の宗教と
いうものを、古代から変わらぬ智慧^{ちえ}の水を湛^{たた}える深い井戸のように思いたがるが、実際のところ、
インドにおける宗教的アイデンティティというのは、特定の社会集団やカーストの習慣、
それから父子相続などの社会的要因と分かち難く結びついていて、そのどれもが現代インド社
会と同じ速度で変化しているのだ。

ここから多くの興味深い疑問が導き出される。大企業タタのトラックが轟音^{ごうおん}とともに走り抜

ける横で、現代インドの道路で聖者やジャイナの尼僧、神秘主義者やタントラ行者が救いを求めるということは、実際どんな意味があるのだろうか。誰かが武力抵抗を神聖な義務だと捉える一方で、また別の誰かは徹底的に非暴力主義^{アヒンサー}を貫くのはなぜか。神を創造できると考える人間がいる一方で、神が自らの内に住まうことができるかと考える人間がいるのはなぜか。さまざまな宗教的伝統はそれぞれ、どのように現在のインドの変化の中を生き延びているのか。何が変わり、そして何が変わらぬままであり続けるのか。物質主義に代わりうる精神的な何かは、本当にインドに求めうるのだろうか。それとも、精神主義といってもより大きな資本主義世界の中で急成長する支配者のひとつに過ぎないのだろうか。

この本のためにインドじゅうを旅する中で、この近代化のプロセスが加速するにつれ、多層な世界が奇妙な形で衝突し合うのを目撃した。たとえばジョードプルの郊外では、ある寺院がエンフィールド・バレットのバイクを囲んで成立し、巡礼地ともなっている。元々はそのバイクに乗って死亡事故に遭った男性を^{しよ}偲んで作られたが、今ではトラックの運転手を中心に、多くの巡礼者を集めている。ラージャスターン州の各地から、生命力のご利益にあやかるべく集まって来るのだ。またタミル・ナードウ州のタンジャヴァールに近いスワミマライでは、神像の製作者であるスリカンダ・ステイパティに出会った。彼はチョーラ朝のブロンズ像製作者たちから続く家系の三五代目である。スリカンダは神像製作をインドで最も神聖な仕事のひと

つだと考えている。しかし現在、都市ベンガルール（バンガロール）でコンピュータ工学を学びたい息子の望みを受け入れなければならない。それからケーララ州の北部カンヌールでは、ハリ・ダースに出会った。ハリは井戸掘りであり、一年のうち一〇ヶ月はパートタイムで看守の仕事もしている。看守というのも、極右ヒンドゥー団体RSS（民族義勇団）と極左共産党の過激な政争による受刑者や拘束されたギャングたちの見張りである。しかし一月から三月にかけてのテイヤムの祭りの季節になると、ハリの仕事は一変する。不可触民タリットの出身であるにもかかわらず、一年のうちこの二ヶ月だけ、全能の神に变身し崇拜されるのだ。そして三月末になると、再び牢獄ろうこくの仕事へと戻っていく。

ラージャスターン州のジャイプルでは、読み書きを知らない山羊飼やぎいモーハン・ポーパールと過ごした。モーハンは四〇〇〇行にわたる長大な叙事詩の、現在ではたったひとり、誦そとんじて歌える継承者だ。放浪の歌い手そして語り手として生きる彼は、ラージャスターンに口承で伝わる大叙事詩のひとつ、英雄神パーブージーを讃たたえる叙事詩をすべて暗唱できる。しかしモーハンが私に語ってくれたところでは、この古くから伝わる口承の芸能は、ポリウッド映画やテレビ番組で放送されるヒンドゥー神話に脅かされているという。そして彼は、生き延びるために古くからの伝承に手を加えてこなければならなかった。というのも、モーハンの伝える叙事詩は、「国民的」叙事詩である『ラーマーヤナ』の、地方版を含んでいる。標準版の『ラーマ

「ヤーナ」では、ラーマ王は鬼王ラーヴァナにさらわれた妻シーターを救うため、ランカー島に赴く。しかしラージャスタン版では、英雄はパーブリーであり、さらわれた妻を救うためではなく、ラクダを盗むためにランカー島に向かうのだ。今、村の子どもたちがテレビで『ラーマーヤナ』を見ると、ラクダはどこに行ったのかと聞いてくる。インド歴史学の大家ロミラ・ターバルが、インド中流階級による新たな「シンジケート化されたヒンドゥー教」と呼ぶ、ゆつくりとした文化の一律化により失われ、脅威に晒さらされているのは、まさにこうした地方の異本、その土地で成立している信仰なのである。

私の出会った人々の中には、近代化の影響をもっと暴力的な形で受けている人もいて、侵略や殺戮さつりく、そして暴力的になりがちな原理主義政治運動の犠牲になっている。話を聞かせてくれた求道者や出家者の多くが、個人や親族の、そうでなければ政治的な悲劇による追放や苦悩、痛みを経験していた。タシ・パサンは一九五九年の中国人民解放軍によるチベット侵攻まではチベットの仏教僧だった。僧院が中国の脅威に晒された時、仏の信仰を護まもるために武力を取ることを決めた。「一度僧侶になった者が人を殺すのは、大変難しいことです」とタシは語った。「それでも、それが必要とされる時もあるのです」。現在、タシは亡命してインドのヒマラヤ山中に住み、祈りの旗を刷る。チベット動乱に参加してから犯した暴力を償うためだ。他にも、家族やカーストから追放され、あるいは宗教的・政治的な暴力に生活を破壊された末に、宗教

的求道者の連帯に愛とコミュニティを見出し、保護され、受け入れられ、他では排斥されていたというのに、今は尊敬すらされている、という人々がいる。

このような物語やジレンマが少しずつ私のノートに溜まり、かつての私が中東の修道士や修道院について記した著書『聖なる山から』のインド版を書くことにした。しかしその過程で出会った人々はあまりにも並はずれていたため、結局この『9つの人生』はかなり異なった形式を取るようになった。二〇年前、私の処女作『マルコ・ポーロ クエストーフィライの古都へ』が出版された頃は、八〇年代まった中で、紀行文学は語り手に重きを置くことが多かった。

語り手の冒険が主題だったのだ。彼の出会う人々は背景の小道具へと押しやられてしまうこともあった。『9つの人生』ではこれを変えたかった。語り手こそを陰に留め、出会った人々の人生を表に押し出し、彼らの物語を舞台の中心に据えた。中には、彼らの個人情報を保護するため、彼ら自身の要請を受けて、名前を変えたり、詳細をごまかしたりしているところもある。

彼らはそれぞれの宗教的であったり倫理的であったりする道徳を生きていて、私は極力それを一方的に判断しないように努めた。もちろん私の取捨選択や編集が私自身の見方や好悪を反映することは疑いないが、「伝える」よりは「見せる」ことを心がけ、登場人物自身に語らせるように努めたつもりだ。その結果として、この本は一部の読者が期待するような客観性には欠けるかもしれない。しかしここで描かれる多くの物語は現代インド生活のより陰とされる側

面に根差しており、ただフレームのみを語り手が定め、登場人物がそれぞれ自身の物語を語ることで、九人の登場人物に作者である私を投影してしまうことを意識的に避けようとした。またこれにより、インドの宗教を題材とした西洋の書き物の多くが囚とらわれている「神秘的なインド」に拘泥した表現の多くを避けられることを願っている。この本は私の宗教的な旅路の記録ではなく、九人の登場人物のそれである。インドの宗教生活の中でもよりエキゾチックだったり野性的だったりする人物もいるが、私たちからかけ離れた存在としてよりは、ただのひとりの人間として描こうと努めた。